公表用（要約版）

第２回　青森市総合計画審議会　第２分科会　議事要旨

【日　　時】　令和５年 11 月 27 日（月）15：00～17：00
【場　　所】　アップルパレス青森　３階　ねぶたの間
【出 席 者】　児玉 寛子　分科会長、柿崎 泰明　委員、佐藤 洋子　委員、
　　對馬 明帆　委員、成田 幾末　委員、張山 英和　委員　計６名
【欠 席 者】　北畠 滋郎　委員
【オブザーバー・傍聴者等】なし
【関係部局】　舘山総務部長、横内税務部長、木村市民部次長、大久保福祉部次長、
　　千葉保健部長、船橋経済部次長、土岐都市整備部理事、
　　奈良市民病院事務局長、小野教育委員会事務局教育部長、
　　佐藤青森地域広域事務組合消防長　計 10 名
【事 務 局】　太田企画調整課長、中村企画調整課主査、相馬企画調整課主事　計３名
【配付資料】
・次第
・各行政分野の課題（案）及び目指すべき方向性（案）
・第１回分科会の御意見のうち課題（案）に反映したもの以外の御意見の取扱い
・あおもり未来ミーティング意見内容一覧
・日程調整表
【会議概要】
○当面のスケジュールと今後の流れを確認した後、以下の配付資料について事務局から説明。各委員が意見を出し合った。

○審議、質疑応答の概要

「子育て支援」分野

（委員）
・市内の校長先生から ICT を活用したプログラミング教育に関してのお話を聞いたことがあります。例えば英語であれば、アシスタントイングリッシュティーチャー（AET）と呼ばれる外部講師の方を招いた授業がありますが、外部講師を招いて ICT の授業を行うという形ができないかなということでした。ただ、学校単位でやるとなると、外部講師を招くための資金などの問題があるということで、市のほうで資金援助や外部講師の配置ができればいいというお話でした。
・もう１点、不登校の児童が最近すごく増えているという話をよく耳にしており、その中で、教育者も含めて、子どもの権利の関係で不登校に関する理解が少し足りない部分もあるのではないかと感じました。

（関係部局）
・ただ今の御意見については、具体的な方策を検討する際の参考とさせていただきたい。

（委員）

・私どもは子ども食堂を実施しながら、いわゆる子育て世代の困っている方々を支援していくということを昨年から始めました。ところが、本当に困っている子育て世代の方が、なかなか手を挙げていただけなくて、昨年の１月から始めてようやく最近になって、本当に困っている方たちが来てくれるような形になりました。したがって、子育て世代の方でなかなか自分から声を上げないけれども困っている方たちをなんとか捉えられるような、いろんなアプローチの仕方があると思いますので、その辺をぜひお願いしたい。

・子ども家庭庁が４月にできまして、子ども大綱のパブリックコメントが終わって、今まとめの段階に入っています。そこで何か具体的にできたものを市でも進めていただきたいと思っております。

（委員）

・１ページにある方向性で「国の子育て支援と連動して」とありますが、さらに「青森市という地域の実情に合わせた子育て支援の取組み」とするとより具体的な取組みが見えてくるのかなという印象を受けました。

「スポーツ」分野

（委員）

・部活動の地域移行ということで、今の段階で私が感じるのは、部活動に取り組んでいる子たちの人数が減っているという心配があります。学校に部活があった時には、気軽に入れた。それは文化部でも運動部でも、敷居が低いということで、たくさんの子たちが部活動に参加していました。ところが外部に移行するようになってから、例えば月謝のような活動費やユニフォームなど、地域のクラブに入るハードルが高くなってしまったという関係者がかなり多くいます。そういう人たちの心配をできれば救うような形の学校の部活動というものをもっと考えていかなければならないと感じております。

・最近はゲームに走る子が急に多くなったような感じがするという指導者の話もあります。そういう調査も含めて、今後、子どもたちに対する接し方も考えなければならないのではないかという気がします。

（関係部局）

・学校の部活が地域に移行した途端にハードルが高くなるということや、とりあえず友達がやっているから一緒にやってみようという形で携わっていた子が行き場所を失っているということは我々も捉えておりまして、今後、具体的な対応について検討してまいりたい。

（委員）

・部活動に関して、低所得者の方々の世帯も視野に入れていくべきだと思います。今、クラブチーム化になって、クラブに入るとなると、どうしても会費等のお金がかかってきます。そこで、どうしても低所得の方たちはそこから手を引かざるを得ない。送り迎えの時間もない。そうして負のスパイラルが出てきますので、子どもたちにそういった格差がないようにスポーツを推進できるような具体策を出していければ、もっとスポーツ人口を増やしていけるのではないかと思っております。

（関係部局）

・現在、国のほうで、休日の中学校の部活動のクラブ化という地域移行ということを令和5年から7年を集中期間として対応する方向で検討してほしいと言われております。その中でも、低所得者層の対応ということが課題として提示されております。具体的な対応案というのはまだ出ておりませんが、国としても課題として捉えておりますので、今後、何らかの対応策が出てくるものとも考えられますので、そういったところも見ながら対応してまいりたいと考えております。

（委員）

・中学校の先生の中には、中学のクラブ活動は生徒指導上すごく必要なものだと感じている人もいる。技術とか専門性の向上も確かに大事なのですが、生徒指導上の効能というのもある程度、頭の片隅に置いて進めていただきたい。

（関係部局）

・児童生徒によっては、学校でそういう部活動をすることを自分が学校に向かう意欲としている子も実際におりますし、部活動で培われるチーム意識などといったものも指導上非常に重要なものであると認識しておりますので、十分配慮して対応してまいりたい。

（委員）

・学校の居残りの時間が長すぎてクラブの時間に間に合わないということで、行けないから辞めてしまうという例がありました。学校が優先なのでしょうけれども、そういうところで芽を摘んでしまっているという実例がありますので、学校と地域のクラブとの連携というところも少し考慮していただきたい。

（関係部局）

・クラブ化に限らず様々な部分でそういったことがある場合には学校のほうに相談していただきながら、折り合う点を見つけていくなどの対応をいただければと考えているところであり、今後においても、そのように学校に指導をしてまいりたい。

「健康づくり」分野

（委員）

・働いていた時はすごく活発に動いていたのに、退職したとたんに体調を崩すということがすごく増えているという話も聞きます。健康づくりもそうですが、気持ちの部分で、退職したということでやりがいや生き甲斐がなくなってしまうという方を何か支援や協力できるような体制が健康に繋がるのではないかなという気がしました。

（委員）

・数値的に、平均寿命とかが全国的に見ると低位置にいるということのようですけれども、結局これは40代や50代で亡くなる方が多いからというのを聞いたことがあります。ですから、早期発見ということで、若い人たちの検診を多くできるような仕掛けとかを準備してあげると、検診を受ける人も多くなるだろうし、治療に早く取り組むことができる人も多くなるというような気がしますので、そのくらいの年齢の人たちにターゲットを絞った対策を講じる必要があると感じます。

（委員）

・私が地域で感じることは、コロナ禍が5類になって地域でも集まりが増えてきているのですが、どの年齢層でも集まる人が少なくなっているような状況です。地域での催し物にも差し支えがあるような形になっていますので、何か具体策を考えていただきたいと思っております。

（委員）

・検診等の受診率向上というのを目指しているのですけれども、何かが引っかかって精密検査を受けなければならないとなったときに、精密検査を受ける人が非常に少ないと話題になったことがありますので、この戦略的取組の中に精密検査の受診率の向上も入れていただきたいです。

（委員）

・こころの健康づくりを進めますという文言はぜひ使っていただきたい。精神的なもので自殺とかが増えているということで、こころの健康づくりというのは、とても重要な文言になると思っています。

・高い死亡率を食い止めるために、がんの早期発見というのは大事だと思います。数年前に第一次産業の従事者の方たちの受診率が非常に低いということを聞いたことがあります。半分にも満たないということで、一生懸命対応して、なんとか50%を打破して、8割、9割にたどり着いて表彰されたという団体があったということで、青森市も第一次産業の従事者の方たちの検診に多岐にわたって対応していただければと思います。

「障がい者福祉」分野

（委員）

・ボッチャというパラリンピックでも行われている障がい者スポーツを通して障がい者の理解を深めるという取組みをしたことがあります。スポーツを通じた理解や交流ということが今後進んでいけばいいのではないかと思いました。

（委員）

・青森市の障がい者支援課の方々が、聴覚障がいの方を呼んで子どもたちに手話を教えたりとか、盲導犬を直接子どもたちに見せたりとかしています。当たり前にそういった方々と小さい時から関わっていくという触れ合いをすることによって、偏見のようなものがなくなってくると思います。とてもいい試みだと思っておりますので、これからも続けていただきたいと思います。

（委員）

・例えば小学校などで、この子は少し学習障がいがあるのではないかと先生が教えてみて感じることがあった時に、親とそのことについて話すのがなかなか難しいという状況があると思います。障がいがある子も健常者と一緒に生活をして、ある程度お互いの理解というのを含めて成長していくということもあります。先生である立場の人が 1 つの教室に 2 人、3 人いてもいいようなケースもあるかと思います。市で手厚く指導をしたり、専門的な指導をする方たちの指導を受けさせたり、少しずつ改善していくことに総合的に取り組んでいかなければならないのかなという思いがあります。

「高齢者福祉」分野

（委員）

・高齢者に関して、免許返納の動きが全国的に活発になっている一方、都市部と比べて地方都市というのは交通網の整備がなかなか厳しい状況にあるというところと、2024 年問題でトラックやバスの運転手も極端に減ってしまうという問題があり、高齢者の交通手段がなくなってしまうという状況に陥るのではないかと気になっている。

（事務局）

・高齢者の交通ということは、まちづくりの第 3 分科会でその点をテーマに審議している最中であり、後ほど、そちらと情報を共有したい。

「男女共同参画」分野

（委員）

・若い世代は男女共同参画についてすごく理解があると感じるのですが、つい最近にあっ

た出来事で、町会の役員の方が女性に対して、女性軽視と思われるような発言があったり、女性が町会の福祉館の中の掃除をして男性はしないみたいなこともあるという情報もあったりしましたので、そういうことがやはりあるのかと感じたところでした。

「地域防災・克雪対策」分野

（委員）

・課題案に自主防災組織未結成町会とありますが、これは町会組織が結成するという意味でよろしいか。

（関係部局）

・町会単位で自主防災組織を作るパターンと、複数の町会が一緒になって自主防災組織を作るというパターンがありますので、その形態について特段の定めはありませんが、基本は、町会が単位になります。

（委員）

・私は幸畑団地に住んでいますので、幸畑団地の実例で言いますと、町会自体の活動がほぼない。高齢化を理由にして活動していないという町会もあります。まちづくり協議会の中で防災訓練を行ったり、地域除雪をやったり、青森市社会福祉協議会の幸畑支部の方が地域除雪をやっているという現状です。町会自体が機能不全に陥っているところにその自主組織をこれから結成するという動きというのは、ちょっと難しいのではないかなと正直思う部分がありますので、町会にそれをお願いすると解決するかというと、私はちょっと疑問に思うところがあります。

・学生ボランティアを募ればいいという話もあったのですが、自主的にボランティアをしたいという意識がある学生もいますけども、募ったから学生ボランティアが集まるかというと、そうではないのかなと思う部分がありまして、そこもすごく難しい問題なのかなと感じました。

（委員）

・方向性の中の地域住民が協力して助け合う「共助」とありますが、「互助」ではないのかと思うのですがどうですか。

（関係部局）

・「互助」というお言葉ですけれども、国の防災関係の通知や指示などの中では、「自助」、「共助」、「公助」という 3 助が基本となっています。自分の命は自分で守るというのをまずは市民の皆さんがきちんと意識していただき、その自助で賄いきれない部分を「共助」で、共助で賄いきれない部分を「公助」でというような仕立てで国からも来ておりますし、我々もその考え方に基づいて、様々な活動をしているという状況です。

「その他」分野

（委員）

・悪質商法の手口や巧妙化という部分なのですが、実際にこういう実例があったという内容のメールが、青森県警のサービスで行っている「青い森のセーフティネット」というメールマガジンで配信されていまして、登録すると、実際に起きた特殊詐欺の詳細が実際に書かれた内容のメールが届きます。すごくわかりやすい内容で書かれていますので、青森県警と連携する形もいいのかなと感じました。

（委員）

・文化芸術に関してのことですが、「郷土の文化を受け止め」という文言を非常に大事にしていくべきと思っております。「関係機関との連携と教育を図りつつ、文化芸術について子どもたちも体験会を確保する取組みを進めます」ということで、これは最近あったことでは、市P連がねぶたの存続のためにKREVAさんを呼んで、皆さんが来ていただければこれからもねぶたを続けていきますよということの取組みを行ったのですが、関係機関との連携で見事に成功したような形を作ったのではないかと思います。すごく高く評価しておりました。これからもそういった、思い切った何かをやっていただければなと思います。

（委員）

・様々なところで、人手不足、担い手不足というのがあって、目指すべき方向性に「NPOや企業、地域団体との連携・協働」という文言がありますけれども、今現在は、NPOという組織自体が、青森市のどこで機能しているのかということも、連携したいと思って動いた時に、NPO組織が実は機能していなかったということもあり得るのかなと。

・ねぶたに関しては、囃子方のほうでも担い手不足に陥っている。あちこちでメンバー募集をしているというお話が聞こえてきていまして、例えば、若い世代や子供たちとかに、そういうふうな活動をしたいのだけれども、活動が夜となると、子どもを連れて親が対応するのは難しいとか、日中は囃子方たちの本業の仕事があってできない。学校の先生たちに囃子のやり方を学んでもらって、授業に取り入れてもらえればどうかという気持ちもあるが、先生たちもいろんな授業をしなければいけないということがある。担い手もそうですが、その伝承をしていくのにもいろんなハードルがあるというお話を聞きました。

○今日の意見の取扱等の事務連絡を行い解散。